TADOKU JUNIOR　ピノッキオの冒険　★★★☆☆ ふつう　610語

Pinocchio, Chapter 4

第4章　もの言うコオロギ

Carlo Collodi (tr. Carol Della Chiesa, 1909)（1883年の本）　**原文そのまま**　朗読：Mark F. Smith

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？　家ににげ帰ったピノッキオの前に、百年も住んでいる「もの言うコオロギ」があらわれ、大事なことを教えようとします。ところがピノッキオは……。



The story of Pinocchio and the Talking Cricket, in which one sees that bad children do not like to be corrected by those who know more than they do.

Very little time did it take to get poor old Geppetto to prison. In the meantime that rascal, Pinocchio, free now from the clutches of the Carabineer, was running wildly across fields and meadows, taking one short cut after another toward home. In his wild flight, he leaped over brambles and bushes, and across brooks and ponds, as if he were a goat or a hare chased by hounds.

On reaching home, he found the house door half open. He slipped into the room, locked the door, and threw himself on the floor, happy at his escape.

But his happiness lasted only a short time, for just then he heard someone saying:

“Cri-cri-cri!”

“Who is calling me?” asked Pinocchio, greatly frightened.

“I am!”

Pinocchio turned and saw a large cricket crawling slowly up the wall.

“Tell me, Cricket, who are you?”

“I am the Talking Cricket and I have been living in this room for more than one hundred years.”

“Today, however, this room is mine,” said the Marionette, “and if you wish to do me a favor, get out now, and don’t turn around even once.”

“I refuse to leave this spot,” answered the Cricket, “until I have told you a great truth.”

“Tell it, then, and hurry.”

“Woe to boys who refuse to obey their parents and run away from home! They will never be happy in this world, and when they are older they will be very sorry for it.”

“Sing on, Cricket mine, as you please. What I know is, that tomorrow, at dawn, I leave this place forever. If I stay here the same thing will happen to me which happens to all other boys and girls. They are sent to school, and whether they want to or not, they must study. As for me, let me tell you, I hate to study! It’s much more fun, I think, to chase after butterflies, climb trees, and steal birds’ nests.”

“Poor little silly! Don’t you know that if you go on like that, you will grow into a perfect donkey and that you’ll be the laughingstock of everyone?”

“Keep still, you ugly Cricket!” cried Pinocchio.

But the Cricket, who was a wise old philosopher, instead of being offended at Pinocchio's impudence, continued in the same tone:

"If you do not like going to school, why don't you at least learn a trade, so that you can earn an honest living?"

"Shall I tell you something?" asked Pinocchio, who was beginning to lose patience. "Of all the trades in the world, there is only one that really suits me."

"And what can that be?"

"That of eating, drinking, sleeping, playing, and wandering around from morning till night."

"Let me tell you, for your own good, Pinocchio," said the Talking Cricket in his calm voice, "that those who follow that trade always end up in the hospital or in prison."

"Careful, ugly Cricket! If you make me angry, you'll be sorry!"

"Poor Pinocchio, I am sorry for you."

"Why?"

"Because you are a Marionette and, what is much worse, you have a wooden head."

At these last words, Pinocchio jumped up in a fury, took a hammer from the bench, and threw it with all his strength at the Talking Cricket.

Perhaps he did not think he would strike it. But, sad to relate, my dear children, he did hit the Cricket, straight on its head.

With a last weak "cri-cri-cri" the poor Cricket fell from the wall, dead!

ピノッキオと「もの言うコオロギ」のお話。悪い子は、自分よりものを知っている人に注意されるのがきらいだということがわかります。

かわいそうなゼペットさんがろうやへ連れていかれるのに、たいして時間はかかりませんでした。そのあいだに、いたずらっ子のピノッキオは憲兵の手からのがれて、野原や草地をむちゅうでかけぬけ、近道に近道をかさねて家へ向かっていました。むちゅうでにげながら、イバラや草むらを飛びこえ、小川や池をわたりました。まるで、りょう犬に追われるヤギかウサギのようでした。

家に着くと、戸が半分開いていました。ピノッキオは部屋にすべりこみ、かぎをかけると、うまくにげられたのがうれしくて、床にごろんとねころがりました。

でも、そのうれしさは長くはつづきませんでした。ちょうどそのとき、だれかがこう言うのが聞こえたのです。

「クリ、クリ、クリ！」

「ぼくをよんでいるのはだれ？」とピノッキオは、とてもこわがってたずねました。

「わたしだよ！」

ピノッキオがふり向くと、大きなコオロギが一ぴき、ゆっくりとかべをはい上がっていくのが見えました。

「ねえ、コオロギ、きみはだれ？」

「わたしは『もの言うコオロギ』。この部屋に、もう百年以上も住んでいるんだよ。」

「でも今日からは、この部屋はぼくのものだよ」とあやつり人形は言いました。「だから、ぼくのためを思うなら、今すぐ出ていって。一度もふりかえらずにね。」

「ここからは動かないよ」とコオロギは答えました。「大事な本当のことをきみに話すまではね。」

「じゃあ話してよ。早くね。」

「親の言うことを聞かずに家出をする子どもは、たいへんなことになるよ！その子たちは、この世で決して幸せになれないし、大きくなってから、とてもくやむことになるんだ。」

「好きなだけ鳴いてなよ、コオロギくん。ぼくにわかっているのはね、あしたの夜明けに、ぼくはここを出ていって、二度ともどらないってことさ。ここにいたら、ほかの男の子や女の子みんなと同じ目にあっちゃう。学校に行かされて、行きたくても行きたくなくても、勉強しなきゃならないんだ。ぼくはね、言っとくけど、勉強なんて大きらい！チョウチョを追いかけたり、木に登ったり、鳥の巣をとったりするほうが、ずっとおもしろいと思うよ。」

「おばかさんだねえ！そんなことをつづけていたら、すっかりロバみたいなおばかになって、みんなの笑いものになるって、わからないのかい？」

「だまれ、みっともないコオロギめ！」とピノッキオはさけびました。

けれどもコオロギは、年をとったかしこいものしりだったので、ピノッキオのなまいきにも腹を立てず、同じ調子で話しつづけました。

「学校に行くのがいやなら、せめて何か仕事をおぼえて、まじめにくらしをたてたらどうだい？」

「ひとついいことを教えてあげようか？」とピノッキオは言いました。だんだんがまんできなくなってきたのです。「世の中の仕事のうちで、ぼくにぴったりなのは、たったひとつだけさ。」

「それは何だい？」

「朝から晩まで、食べて、飲んで、ねて、遊んで、ぶらぶらする仕事さ。」

「ピノッキオ、きみのために言っておくよ」と、もの言うコオロギは落ち着いた声で言いました。「そんな仕事をする者は、最後はかならず病院かろうやに行くことになるんだ。」

「気をつけろ、みっともないコオロギめ！ぼくをおこらせたら、ひどい目にあうぞ！」

「かわいそうなピノッキオ。きみが気のどくだよ。」

「どうして？」

「だってきみはあやつり人形で、もっと悪いことに、頭まで木でできているんだからね。」

この最後のことばを聞くと、ピノッキオはかっとなって飛び上がり、作業台から金づちを取って、力いっぱいもの言うコオロギに投げつけました。

たぶん、当たるとは思っていなかったのでしょう。けれども、悲しいことに、みなさん、金づちはコオロギの頭にまともに当たってしまったのです。

かぼそい「クリ、クリ、クリ」という声を最後に、かわいそうなコオロギはかべから落ちて、死んでしまいました！

たんご と クイズ　第4章　もの言うコオロギ

cricket コオロギ	**wall** かべ	**school** 学校
butterflies チョウチョ	**trees** 木	**nests** 巣
donkey ロバ	**hammer** 金づち	

Q1 コオロギはこの部屋に何年住んでいる？

① 10年　② 百年以上　③ 1年

Q2 ピノッキオが「ぼくにぴったり」と言った仕事は？

① 大工　② 学校の先生　③ 食べて遊んでぶらぶらすること

Q3 ピノッキオがコオロギに投げたものは？

① 金づち　② くつ　③ 本

こたえ

Q1　②　コオロギは「この部屋に、もう百年以上も住んでいるんだよ」と言いました。ピノッキオよりずっと先に住んでいたのです。

Q2　③　朝から晩まで、食べて、飲んで、ねて、遊んで、ぶらぶらする仕事がぴったりだと言いました。

Q3　①　「頭まで木でできている」と言われてかっとなり、作業台の金づちを力いっぱい投げつけました。

原田英語の多読ベストジュニア

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #500（Carlo Collodi (tr. Carol Della Chiesa, 1909)、1883年）。パブリックドメイン。

挿絵：この本には挿絵がないため、場面をイメージして AI（Codex）で描いた絵です。

朗読（Web版）：Mark F. Smith（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）

和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは 3 重チェック。人の目でも順次確認しています。